

ライブハウス研究をアップデートする：ジェンダー、労働、そしてイデオロギー

発表者

小林篤茂（駒澤大学／会員）

竹田恵子（東京外国語大学／非会員）

宮入恭平（立教大学／会員／コーディネーター）

討論者

太田健二（甲南女子大学／会員）

ポピュラー音楽研究において、ライブハウスをテーマとした議論がおこなわれるようになって久しい。ライブハウスに関する研究では、多種多様な議論が蓄積されてきてはいるものの、昨今の社会情勢を鑑みた課題や問題点などが反映されないままに、現状にはそぐわないような論点も散見される。たとえば、ジェンダーや労働に関しては、これまで語られることのなかった重要なテーマとなっており、そこに含まれる課題や問題点は、ライブハウス文化におけるさまざまな弊害を生じさせてきたにもかかわらず、適切な検証がおこなわれることのないままに可視化されることがなかった。このような問題意識を根底に据えながら、現状の視座における価値観を更新すべく、2025年12月に刊行予定の『ライブハウス・スタディーズ—箱（ハコ）をとり巻く生態系（エコシステム）』（ナカニシヤ出版）では、これまでのライブハウス研究で見過ごされてきた課題や問題点に注目している。本ワークショップでは、『ライブハウス・スタディーズ』での問題意識を反映させながら、これまでのライブハウス研究をアップデートするための議論を展開させる。

まず、『ライブハウス・スタディーズ』の編著者である宮入恭平が同書の概要に触れながら、本ワークショップにおける論点を説明する。そもそも、同書に通底する問題意識は、コロナ禍で顕在化した課題によって導きだされたものだ。その根底にあるのは、これまでライブハウス文化のなかで培われてきたイデオロギーだ。商業化が加速した1980年代後半になると、ライブハウスはみずからの存在を正当化するための物語を描き、その後のライブハウス文化に影響をもたらすことになるイデオロギーをつくりあげた。そこから生じたヒエラルキーは、周縁化された事象を隠蔽しながら、ライブハウス文化の本質的な問題を隠蔽してきた。そこには、ジェンダーや労働に関する課題や問題点も含まれるのだ。

ジェンダーに関しては、『ライブハウス・スタディーズ』の執筆者でもある竹田恵子が、ライブハウスにおける「地下アイドル」とそのファンについて報告する。はじめにアイドル活動の「労働」的側面を明らかにし、とくにジェンダーの視点からアイドルの感情労働やケア労働に焦点を当て、アイドルの脆弱な立場を構造的問題として指摘する。しかしながら、本発表ではアイドルを一方的な「犠牲者」、「被害者」とする視点から距離を置き、アイドルが自分のリスクを減ずるためにファンと「交渉」するやり方について言及する。そして、地下アイドルの現場が持つ楽しさや魅力を保ちながら、より安全で持続可

能な活動について構想する。

労働の観点からは、『ライブハウス・スタディーズ』の執筆者である小林篤茂が、PA エンジニアの労働環境に焦点を当て、これまで可視化されてこなかった実態について報告する。ライブハウスでは PA エンジニアの長時間にわたる業務が前提となっており、雇用形態もパートタイムや業務委託（フリーランス）であるケースが目立つ。また、音響技術という専門的な職種であるにも関わらず、報酬も最低賃金に近い水準の時給であることが一般的であり、十分な報酬が支払われているとは言い難い。このような長時間労働や不安定な労働条件は、ライブハウスという業態においては珍しいことではない。また、コロナ禍においては、「SaveOurSpace」や「WeNeedCulture」などによるライブハウス事業者に向けた支援はあったものの、PA エンジニアを含む裏方スタッフにまで行き届くものはなく、ライブハウスにおける雇用の脆弱さが浮き彫りになった。

ここまでの発表者による報告内容を受けて、ライブハウスやクラブといった比較的小規模の音楽空間に関する研究に携わっている太田健二に、討論者の立ち位置から総評を述べてもらおう。さらに、全体の内容に関して、フロアからの質問やコメントに登壇者が対応する。本ワークショップでは、登壇者からの一方的な報告というよりはむしろ、フロアを交えて多様な視座から有意義な議論を展開できればと考えている。